２０２５/１２/２１　　礼拝メッセージ　　近藤 崇志　牧師

主　　題 ： 約束を守られる主④：『苦難のしもべ』
聖書箇所 ： イザヤ書５３章１－６節

　この朝は、神様のことばである聖書の中から、イザヤ書５３：１－６のみことばを一緒に考えてみたいと思いますが、その前に少し考えてほしいストーリーがあります。遡ること、今から１８年前の２００７年、ある一つの社会実験が行われました。その実験の内容は、世界的にも有名なバイオリニスト、ジョシュア・ベルが変装して、忙しい朝の地下鉄の構内でバイオリンを弾けば、何人の人が耳を傾けるのかというものでした。実験に先立ち、結果の予想を尋ねられた人物は、このように答えています。
「１０００人のうち７５人～１００人は立ち止まって、しばらく耳を傾けると思います。その演奏によって少なくても１５０ドルは稼ぐでしょう」と。ちなみに、実験の３日前に行われた彼のコンサートでは、２０００人が入る会場は満席で、最も安い席でも１００ドルの値がついていました。果たして、地下鉄の構内ではどうなったのでしょう。実験の当日、ベルは駅にやって来ました。ジーンズに長袖のＴシャツを着て野球帽をかぶって現れた彼はケースからバイオリンを取り出し弾き始めました。金曜日、朝のラッシュアワーの真っ最中、約４５分にわたり、彼は６曲ものクラシック音楽を演奏しました。その間、実に１０００人以上もの人がその前を通り過ぎて行きました。その結果は、残念ながらほとんどの人が足を止めることはありませんでした。最終的に足を止めて耳を傾けたのは、たったの７人で、稼いだ金額は３２ドル１７セントに留まりました。驚きではありませんか。もし、野球帽をかぶった人物の正体が、世界を代表する音楽家だと気づいていれば、当然、結果は変わっていたでしょう。もし、彼のバイオリンが推定３億円もするストラディバリウスだと気づいていれば、その演奏の価値を知って、人々はその機会を感謝していたでしょう。そこで流れていた音楽の美しさは、３日前のコンサートと何ら変わらないものでした。演奏していた人物も同じでした。しかし、目の前にあるものが自分たちの思い描く、自分たちの期待する姿ではなかったから、人々はそれに気づくことはありませんでした。すぐそこに、だれもが羨むような喜びがあったにもかかわらず、聞く気のない耳に、見る気のない目には、何も入ってこなかったのです。これは悲劇的なことでした。しかし、これ以上に悲劇的な出来事がかつてありました。それはきょう私たちがクリスマスをお祝いする理由、まさに約束の救い主として生まれたイエス・キリストに関することです。

●救い主に関する預言／約束

　思い出してみてください。今から約２０００年前、飼葉おけで生まれたイエス様、この出来事は単なる偶然ではありませんでした。誕生についての預言、約束というのは、この方が実際に生まれる数百年も前からさまざまな預言者を通してなされていたわけです。ですから当時の人たちは、よく知っていました。新しく生まれて来る者が「**インマヌエル**」（イザヤ７：１４）と呼ばれることも、新しく生まれて来る者がひとりの「**処女**」（イザヤ７：１４）を通してて与えられるということも、新しく生まれて来る者が「**暗闇の中で輝く光**」（イザヤ９：２）となることも、新しく生まれて来る者が「**不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君**」（イザヤ９：６）と呼ばれることも、新しく生まれて来る者が、いつか王として「**正義に満ちた王国**」（イザヤ１１：４－５）を築かれるということも、彼らはよく知っていました。知っていただけでなく、彼らこそが、その誕生をずっと心待ちにしていました。
また、実際にイエス様こそ、約束どおりの方でもありました。新約聖書の最初の本、マタイの福音書を読んでみると、このようなことばがありとあらゆるところに繰り返されています。マタイ１：２２にはこのようなことばが出てきます。「**この出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。**」と。約束は生まれたイエス様にあって確かに成就しました。人々が長い間待ちわびていた喜びを

もたらす、すばらしい救い主は生まれたわけです。しかし、その方に対して人々はどのような態度をとったでしょう。待っていたから、当然大喜びで感謝したでしょうか。いいえ、多くの人たちがこの救い主を拒みました。ヨハネ１：１１でこのように言われています。「**この方は自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。**」と。間違いなく、みなが待ちわびていた約束どおりの存在は目の前にいました。それにもかかわらず、人々はそのすごさに気づくこともなければ、受け入れることもなかったわけです。

○『苦難のしもべ』：約束の救い主に関する三つの姿

いったいどうしてでしょう。その答えを、きょう私たちが見るみことばが明らかにしてくれます。イザヤ５３：１－６を開いてください。この箇所は、なぜ人々が約束の救い主を拒んだのか、その理由を私たちに教えてくれます。それだけではなく同時に、その拒まれた約束の救い主が成し遂げられたすばらしいみわざ、救い主を受け入れる者に与えられる最高の希望をも明白にされていました。ですからこのクリスマス、いま一度、やって来られた約束の救い主に目を留めてみましょう。この方がもたらしてくれる大きな喜びと希望、それを拒んで、その前を何もないかのように通り過ぎるのではなく、心から感謝することができる機会となることを心から祈っています。いつものとおり、まずみことばをお読みします。

イザヤ書５３：１－６

「**:1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕は、だれに現れたのか。:2 彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**」

１．罪人に拒まれた救い主　１－３節

まず一つ目に私たちが目を留めたい約束の救い主の姿が１－３節に描かれていました。一つ目の姿は「罪人に拒まれた救い主」です。１節をよく見てください。「**私たちの聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕は、だれに現れたのか。**」とあります。「**だれが信じたのか**」、「**だれに現れたのか**」と、これは一見、単なる質問のように、疑問が投げかけられているように思えるかもしれませんが、実はそうではありません。ここでの問いかけは、強い嘆きや強い驚きが含まれていました。何を嘆いていたのでしょう。

▶「主の御腕」

ここに「**【主】の御腕**」と出てきましたが、このことばは旧約聖書の中で何度も登場し、神様の圧倒的な力や強さ、権威を表す比喩的な表現でした。神様の御腕が伸ばされているところには、いつも、人の創造を遥かにまさる大きな力が示され続けてきました。たとえば、エジプトの奴隷となっていたイスラエルの民を、神様はエジプトから助け出されるわけですが、その時に使われる表現も「**【主】の御腕**」でした。特に、あの有名な紅海を二つに分けた場面を描く際にも、頻繁にこのことばが使われていました。また同じイザヤ書の中にも５１：９ａ－１０で「**:9 さめよ。さめよ。力をまとえ。【主】の御腕よ。……:10 海と大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々を通らせたのは、あなたではないか。**」と。まさにこのことばどおりでした。人には手に負えないような屈強のエジプトの軍隊も、目の前に広がる広大な海も、まことの神様には何の問題もありませんでした。この世界を造られた神様こそ

圧倒的なお方でした。伸ばされるその「**【主】の御腕**」にまさる力など、どこにも存在しなかったわけです。「**【主】の御腕**」は、神様の圧倒的な力を示すものでした。本来、聞く耳や見る目があれば、この世に来られたイエス様のうちにこそ、その神様としての力を見て取れるものでした。地上におられた間、イエス様は文字どおり、神様にしかできない奇跡を繰り返しなされていたわけです。ある時には水をぶどう酒に変えられ、ある時には憑かれた者から悪霊を追い出し、ある時には荒れ狂う嵐をことばでもって静め、ある時には盲目な者を見えるようにし、足の不自由な者を歩けるようにし、またある時には死んでいた者さえよみがえらせていました。約束の救い主として来られたお方は、ご自分こそが力ある神様なのだという「しるし」を人々の前で何度も何度も明らかにされていたわけです。

しかし、これほどまでも明白にされていた偉大なお方を、その力をだれが信じたのでしょう。残念ながら多くのイスラエルの民たちは信じませんでした。聞いていなかったからではありません。目にしていなかったからでもありません。どれだけことばを聞き、どれだけ力を目の当たりにしていたとしてもかたくなに信じ受け入れなかったわけです。その悲劇は別の箇所でもこのように述べられています。ヨハネ１２：３７－３８で「**:37 イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。:38 それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。**」と、まさにイザヤ５３：１が引用されています。

●人々が救い主を拒んだ理由：

なぜ人々は、これほどまでに明白に記された「しるし」を見逃したのでしょう。どうして約束の救い主を拒絶していたのでしょう。その理由が、イザヤ５３：２に挙げられています。「**彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。**」と。ここに大きく二つの理由を見ることができます。

１）期待外れの始まりのゆえ

人々が約束の救い主を拒んだ一つ目の理由は、「期待外れの始まりのゆえ」でした。来られたイエス様の姿が、人々が思い描いていた誕生の姿とは大きく異なっていたわけです。たとえとして、ここに二つの植物が出てきました。「**若枝**」と「**砂漠の地から出る根**」と言われていました。「**若枝**」と言うのは、立派な木に力強く生えているような枝のことではなく、切り倒された後の切り株から、ちょこんと生える小さな根のことを言いました。「ひこばえ」とも言われるこの小さな芽は、本体の木が成長するのに必要となる水分や養分を奪ったり吸い取ったりするため、通常は切り取られてしまうような些細な存在でした。また「**砂漠の地から出る根**」は言うまでもなく、カラカラに乾き切った砂漠に根が生えていれば、この植物はすぐに干からびて死んでしまうと思います。乾き切った水のない、いのちの姿など見えないところに生えている根は、だれの目にも留まらないような些細な存在でした。よく考えてみてください。人々が期待していたのは、圧倒的な力を持った救い主の登場でした。しかし、現れたイエス様は、どのような様子で誕生されたでしょう。この方の両親は、権力を握る一国の王様ではありません。小さな町ナザレで大工を営んでいたヨセフとマリヤのもとに生まれました。この方の生まれた場所も豪華な王宮の一室ではなく、家畜が飼われていた小屋、しかもその家畜の餌が入れられるような飼葉おけに寝かされていました。この方の誕生に立ち会ったのも、各国の大臣や多くの家来ではありません。最初に尋ねて来たのは、当時の社会の中で嫌われている最下層の羊飼いたちでした。イエス様の誕生を見る時、そこにはだれもが驚くような姿はありませんでした。どれを見ても、取るに足りない期待外れのように見えました。人々の目には、この方こそが約束の救い主だと言える存在には映らなかったわけです。

２）期待外れの見た目のゆえ

また人々が約束の救い主を拒んだ二つ目の理由は、「期待外れの見た目のゆえ」でした。来られたイエス様の姿のうちには、人々が見とれるような姿かたち、慕うような見ばえがなかったわけです。これは、イエス様が見るに堪えない醜い容姿だったということではなく、圧倒的な救い主を期待していた者たちの目に映った姿が、あまりにも期待とかけ離れていた普通のものだったということを強調しているわけです。私たちも「王様」と聞けばどのようなイメージを持つでしょうか。立派な王冠をかぶって、立派な椅子に座っているような力強い姿かもしれません。颯爽と馬にまたがって、兵を率いて戦いに向かっていくような格好の良い姿かもしれません。実際、イスラエルの最初の王様として立てられたサウル王も容姿端麗で、周りと比べても背が高く、力強い、まさにこの人こそ王様にふさわしいと、みなが認めるような存在でした。王様に選ばれるような存在であれば、何かしら人と違っていて、何かしら特別で、まわりを惹きつけるような魅力を持っていると、今の私たちでさえ、このようなイメージを持っています。しかし、世に来られた救い主は違っていました。人々の目に映るこの方の姿は、まわりの人と何も変わらない、ごく普通のものだったわけです。イエス様を見た者たちが「この方こそ王様だ」と「見ればわかる」と言えるような目立った特徴は何もありませんでした。体格も特別ではなく、着ていた服も、まわりと何ら変わりありません。その姿に威厳や力強さというものもありませんでした。町中ですれ違ったとしても「ああ、今救い主が横を通り過ぎました」と気づくことがないほど、この方は平凡な姿をしていたわけです。だからこそ、人々はこの方の前を通り過ぎていきました。自分たちの思い描いていた姿に当てはまらなかったから、そこに約束の救い主はいたのに、そこで約束の救い主は語っていたのに、そこで約束の救い主はすばらしい力を示していたのに、彼らは自ら目をそむけ、この方をかたくなに拒んだのです。

またそれだけではなく、続く３節にもはっきりと記されています。「**彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。**」と。イエス様は、働きをなした地上での３年間、絶えず拒絶を経験されました。その拒絶は、自分を救い主と決して認めようとはせず、憎しみを抱くようなパリサイ人や律法学者からだけ受けたのではありません。救い主であると信じることのできなかった身近な者たち、自分の家族や弟子のひとりからさえも拒絶されました。イエス様は変わらず人々を愛して、喜んで人々に仕えておられました。悲しみの人として、人々の悲しみや苦しみを知っていたからこそ、いつも寄り添ってあわれみを示そうとされていました。しかし、多くの人々は、自分たちの思い描いている姿ではなかったから、この方をののしり、悪口を浴びせ、忌み嫌い、否定し、顔をそむけ、最後には「十字架につけろ！十字架につけろ！十字架につけろ！」と叫び、この方を十字架にかけて殺したわけです。約束の救い主は罪人のために来られたのに、罪人に拒まれたお方でした。ある人は、このようなお方のどこに喜びや希望があるのかと思うかもしれません。確かに１－３節だけを見るのなら、どこにも希望など見えません。ここで話が終わっていれば悲劇でしたが、まだ続きがあります。驚きの事実が次に記されています。

２．罪人の身代わりとなられた救い主　４－５節

二つ目に目を留めたい約束の救い主の姿は、「罪人の身代わりとなられた救い主」です。４節を見てください。「**まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。**」と。ここで注目してほしいのは「**私たち**」ということばです。何度も出てきました。４節だけでも３回、この後見る５－６節にも合計６回にわたって出てきました。「**私たち**」、「**私たち**」、「**私たち**」と――。いったい何が強調されているのでしょう。この約束の救い主は、自分自身のものではなく、私たちのものを代わりに背負われたということです。この方が負われたのは自分の病ではありません。この方がになわれたのは自分の痛みではありません。本来なら何の関係もない、負う必要などいっさいない私たちの病を、私たちの痛みを代わりに背負われたわけです。

しかし当時の人たちは、その意味を全く理解できませんでした。十字架にかかっているイエス様を見た群衆たちは、それぞれに勝手な考えを抱いていました。この人は神に罰せられ、神に打たれ、神によって苦しめられているのだと。自分の犯した罪のゆえに、今この方は神様によってふさわしい報いを受けて苦しんでいるのだと。人々は最後まで、なぜイエス様が十字架の上で苦しんでいるのかがわかりませんでした。ですから、その姿を見た者たちはみなあざ笑い、あざけりのことばをもって、この方をののしっていたわけです。福音書を読めば、いろいろなところに出てきます。マタイ２７：３９－４２では「**:39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、:40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」:41 同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。:42「彼は他人を救ったが、自分は救えない。」**」と。人々は、十字架の上で苦しむイエス様が自分の罪のゆえに苦しんでいると思いました。しかし、これが大きな間違いでした。自分の犯した罪ゆえに神に罰せられていると人々が思い込んでいた苦しみや痛みは、本来であればイエス様に値するものではありませんでした。この方が十字架の上で受けていた苦しみは、ただ私たちに代わって引き受けてくださったものだったわけです。そのことが続く５節でさらに明白に語られていました。「**しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。**」と。イエス様が十字架で苦しまれたのは、自分の罪のためではないと書かれていました。この方のうちには何の罪も見いだされませんでした。イエス様こそ、すべてのことにおいて従順で、正しいことをなされた完全なお方でした。みことばもこう言っています。Ｉヨハネ３：５で「**……キリストには何の罪もありません。**」と。罪の全くないお方が、私たちのそむきの罪のために刺し通されました。私たちの咎のために、罪の全くないお方が砕かれました。この救い主は、私たちの身代わりとして死なれたわけです。

立ち止まって、みことばが言わんとしている意味を、自分のこととして考えてみてください。ここで「**そむきの罪**」と言われていたのは、自らの意思で神様に逆らい、拒絶することです。「**咎**」と言われていたのは、正しい神様の前に間違ったこと、悪や不正を行うことです。要するに、罪のないイエス様が身代わりとなったのは、正しい者のためではありません。悪い者のためでした。まさに自分のことをさげすみ、のけ者として拒絶するような逆らう者のため、生まれながらに神様を拒んで、かたくなに逆らい生きてきた私やあなたのような罪人のためにご自分のいのちを捧げられたのです。

同じ真理をペテロもこのように教えていました。Ｉペテロ３：１８に「**キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。**」と。また、パウロもはっきりとこう述べていました。Ⅱコリント５：２１に「**神は、罪を知らない方**（イエス様）**を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。**」と。決して忘れてはいけません。正しいイエス様は、悪い私たちの身代わりとなるために来てくださった約束の救い主でした。罪のないお方があの十字架にかかったのはご自分の罪のためではなく、十字架に値したのは、本来罪人である私たち自身でした。生まれながらに創造主である神様を認めようとせず、罪に罪を重ね、逆らい続けていた――ここにいる私たちもそうです。私たちこそ、十字架の上での苦しみやさばきを受けるに値する存在でした。しかし、そんな罪深い私たちの犯した罪や咎のすべてを背負って、罪を知らないお方が代わりに死んでくださったわけです。

この方は私たちとは違います。この方は私たちのように過ちや罪を犯すような者ではありません。この方は地上にいる間、いっさいの過ちを犯すことはありませんでした。完全なお方でした。そんな完全なお方が私たちの代わりに十字架で釘づけにされました。この方は私たちとは違います。この方は偉大な力を持っていた神の御子でした。そんな御子が私たちの代わりに十字架で罪の罰を受けられました。この方は私たちとは違います。私たちはいつも神様を喜ばせることなどできません。しかし、この方は

父なる神様の前に、いつも喜ばれることだけを行った救い主でした。そんな救い主が私たちの代わりに罪に燃える神様の御怒りを十字架で味わい、激しい苦痛にもだえ苦しんだ後に死んでいったわけです。本来であれば、そのすべて、罪の罰も御怒りも痛みも苦しみも傷も、罪を犯した私たちの上にこそ下るべきものでした。それにもかかわらず、どういうわけか、罪のないキリストが大きな愛のゆえに、十字架の上で私たちの代わりに砕かれたわけです。ほかのだれでもありません。約束された救い主が偉大な身代わりとなって、私たちが負うべきすべての咎を、その身に背負って死なれたわけです。

いったい何のためでしょう。なぜこの方は、これほどまでに人々にさげすまれ、ののしられた挙句、さらに十字架の上で苦しみ、身代わりとなられたのでしょう。この身代わりは何のためだったのでしょう。その答えが５節の後半に書かれていました。「**彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。**」と。その身代わりは、平安といやしをもたらしてくれるためでした。神様に逆らっていた私たちの代わりに、イエス様が懲らしめを受けられたから、木の上で血を流されたから、その結果、罪を犯していた私たちが御怒りではなく、罪を犯した相手である神様との間に平安を、平和を持つことができるようになったわけです。これほど驚くべき事実はありません。

よく考えてみてください。たとえば私たちのまわりで、だれかがだれかのことをひどく痛めつけたとして、ひどく傷つけたとして、どちらが赦しを求めに行くことを期待されるでしょう。おそらく、傷つけた側が傷つけられた側のところに行って、和解を求めるでしょう。赦しを求めるでしょう。加害者の方が率先して動くことが当たり前だと、私たちも思っています。そのような赦しを期待します。しかし、ここで起こっていたことは、その真逆でした。傷つけられた側である神様が、傷つけた側の罪人に率先して赦しを与えようとされていました。罪によって壊れた関係を修復しようと、神様が解決策を提示されていました。ご自分にかたくなに逆らっている、本来ならさばきのみが値する罪人のために神様ご自身が、約束の救い主を送られたわけです。そして、その約束の救い主が十字架にかかって罪人の身代わりとして死なれたからこそ、神様はこの方を信じるすべての者に、ご自分との平和を与えると約束してくださったわけです。これが、神様が示してくださった愛というものでした。神様の愛は、私たちが持っている愛、私たちが考える愛とは全く違います。神様の愛は何かを受けたから示されたものではありません。それに値するような者に対して示されたものでもありません。神様の愛は、ご自分に逆らい、ご自分を拒み続けるような、ご自分をさげすみ、ご自分を汚すような者にさえ、自ら率先して明らかにされ、救い主のいのちという犠牲を伴うものでした。

ローマ５：８にもこのように書かれています。「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**」と。皮肉なことに、人々が期待外れだと、平凡な、些細な存在だと軽んじた救い主こそ、すべての人に最も必要なものを与えに来られた約束の救い主でした。偉大なお方でした。まさにこの方こそ、現れた「**【主】の御腕**」でした。この方は、すべての点で神様に従順に従い、最後は自ら進んで十字架にかかりました。自分の罪のためではありません。いっさい罪のない神の小羊として、罪に汚れた私たちの身代わりとなって死ぬためでした。そして、この完全な救い主が身代わりとして御怒りを受けて、御怒りをなだめて砕かれたから、神様は私たちの罪を赦し、ご自分と和解させ、平和を持つことができるようになったわけです。

私たちがこのクリスマスを喜び、イエス様の誕生を祝っているのは、この方が私たちの罪の身代わりとして来てくださった約束の救い主だからです。この方は、どれほど私たちの愛にふさわしい、私たちの礼拝にふさわしい偉大なお方でしょう。

Ｊ・Ｃ・ライルというひとりの先生も、この偉大な身代わりのみわざに関して次のようなことばを残しています。自分自身のこととして考えてみてください。「イエスはなぜ鞭打たれたのでしょう。それはその傷によって、私たちが癒されるためでした。イエスは罪なき方でありながら、なぜ有罪と宣告さ

れたのでしょう。それは罪ある私たちが無罪と認められるためでした。イエスはなぜ茨の冠をかぶせられたのでしょう。それは私たちが栄光の冠をいただくためでした。イエスはなぜ衣をはぎ取られたのでしょう。それは私たちが永遠の義を着せられるためでした。イエスはなぜ嘲られ、ののしられたのでしょう。それは私たちが尊ばれ、祝福されるためでした。イエスはなぜ悪人と見なされ、罪人の一人に数えられたのでしょう。それは私たちが無実だと見なされ、全ての罪から義とされるためでした。イエスはなぜ「自分さえ救えない」と言われたのでしょう。それは他の人々を完全に救うことがおできになるためでした。イエスはなぜ最後に死なれたのでしょう。それも最も苦しく、恥ずべき死で。それは私たちが永遠に生き、最高の栄光に預かるためだったのです。」と。

３．罪人の希望となる救い主　６節

ここまで約束の救い主の拒まれた姿、身代わりとなった姿を見てきました。最後にもう一つだけ別の姿に目を留めてみましょう。三つ目の姿は、「罪人の希望となる救い主」です。６節にこのように記されています。「**私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**」と。みことばはここで、すべての罪人が例外なく持っているある特徴、ある性質を、動物をたとえに使って表現していました。使われていた動物は羊でした。多くの方は、既にご存じかと思いますが、羊という存在は、自分たちだけでは生きて行くことができない。か弱くて、また愚かな動物ともされています。以前、私が見た一つの動画では、溝にはまって、泥だらけになっていた羊を、羊飼いが引っ張り上げていました。そしてやっとのことで引っ張り上げた途端、羊は何をしたと思いますか？羊飼いのもとで安心して休んだのでしょうか。いいえ、その羊は大きくジャンプをして、またその溝の中に自ら飛び込んでしまいました。せっかく助けられたのに、また泥まみれになっていたわけです。なぜ羊は、このような行動を取るのでしょう。白くてもふもふしていて、一見可愛く思えるこのような動物が、残念ながら賢い動物ではないからでした。彼らが持っている性質は、愚かで、頑固で、過ちや失敗からいっこうに学ぼうとしないような者でした。それこそが、まさに私たち罪人の姿でもあるわけです。正直に自分のうちを探ってみれば、みな同じ性質、特徴を持っています。私たちも賢くありません。私たちもさまざまな点において頑固です。私たちも同じ罪や失敗を犯したとしても、そこから何も学ばず、同じように何度も繰り返したりします。「神様、もうこれはしません」と自分の中で決めて考えたとしても、私たちは同じように罪を犯すことがあります。私たちを造られた羊飼いなる神様のことばに聞き従わず、自分の思いや考えに聞き従い、世の中の声に聞き従い、勝手に迷ってしまっていることがあります。本来、私たちこそ自分たちだけでは生きていくことができない、か弱くて、羊飼いを必要としている愚かな羊なわけです。しかし、感謝なことにここに希望があります。私たちは自分勝手にひとりで生きて行く必要はありません。いや、生きて行くべきでもありません。私たちには、どんな時にも身を寄せることのできる最高の羊飼いがいます。愚かな私たちの罪を贖うため、その身にすべての咎を背負い、羊のためにご自分のいのちをささげてくださった最高の約束の救い主がいます。その方こそ、十字架にかかったイエス・キリストです。

Ｉペテロ２：２２－２５にこのように書いています。「:22 **キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。:25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。**」と。この羊飼いを、あなたは今も拒み続けているでしょうか。あなたが本当に必要としている罪の赦し、救いを与えることのできる約束の救い主の前を、ただ通り過ぎていないでしょうか。もし、まだこの方に顔をそむけ続けているのであれば、かたくなに神様に逆らって、羊のようにさまよい続けている人がいるのであれば、どうか、このクリスマス、神様に逆らっている罪を悔い改

めて、イエス様を自分の救い主、主として信じ受け入れてください。どうか、あの十字架の上で示された、身代わりとなって死なれた救い主の愛を、救い主にある希望を、自分のこととして知ってください。身代わりとなってくださった羊飼いとともに生きていくことができる喜びを、ぜひ知ってください。

もうその愛を知っている皆さん、私たちはこの世の中で、だれよりも喜べる理由を持っています。私たちが先に助けを求めたのではありません。神様が、ご自分に逆らう罪人のために約束どおりに救い主を送ってくださいました。そして、顔をそむけてこの方をさげすみ、拒絶し続けていた罪人として歩んでいた私たちに、神の御子が十字架で死なれました。来られた救い主が、私たちの代わりに、私たちのそむきの罪の代わりに刺し通され、私たちの咎のために砕かれたわけです。こんなにも大きな犠牲を払って、神様は私たちのことを贖ってくださいました。身代わりの十字架を通して、神様は私たちを愛して、ご自分のものとして買い取ってくださいました。そのようにして、はっきりと示された愛に心を留めるのであれば、きょう私たちはどのように感謝できるでしょう。きょう私たちは、どのように生きて行くことができるでしょう。神様の愛によって、尊い犠牲によって買い取られた私たちの人生は、もう私たちのものではありません。私たちはこの方のために、すべてを捧げて生きて行くべきです。この方が示してくださった愛を知ったのであれば、私たちの考える愛や感じる愛ではなく、この方から受けた愛で、互いに愛し合っていくべきです。この方の示してくださった犠牲を心に留めるのであれば、私たちはただそれに感謝して、ただ心からほめ歌を歌い続けていくべきです。このクリスマスは、最高の喜びをもたらしてくれました。このクリスマスは、私たちがいつも喜んでいられる希望をもたらしてくれました。ですから、喜びにあふれた者として、この一週間もともに歩んで行きましょう。